２０１５．３．１４．

＜最終講義＞

金融史研究におけるピール銀行法の意義

——内生的貨幣供給論および信用先行説
の視点を取り込んで ——

金井　雄一

Ⅰはじめに

◎1844年　ピール（R. Peel）内閣　イングランド銀行勅許法（ピール条例）　制定

・イングランド銀行の金準備枯渇　⇒　金融パニック
　　金準備増減と銀行券増減が一致させられていないため
　　∴パニック防止のために銀行券量を金準備額に一致する仕組みを作る
・発券部と銀行部に分割　　発券部は金準備額 ＋ 1400万ポンドしか発券しない
　　金準備が減れば同額だけ銀行券が減る　　自動調節　パニックは起きない

・通貨学派　「通貨原理」　　金の国外流出　⇒　貨幣量減少　⇒　物価低落
　　貨幣数量説　　銀行券量は経済の外から統制できるという考え方＝外生説

◎1980年代半ば頃（？）までの日本の経済学界　　ピール銀行法への高い関心
・（もっとも）経済史研究者による金融分野の研究は他分野に比べると未展開
　　ピール銀行法に限らず金融に関する歴史的研究は金融論研究者によって
・（その結果）　　理論的問題意識からの議論 ＞ 経済史研究からの実態解明

・ピール銀行法に関しては権威ある書物の中にも・・・・

「ピール銀行法の目的は『国外に出ていく五ポンド鋳貨に対して五ポンドの銀行券が流通域から引き上げられる』ようにすることであったから、この法律は支払手段が最も多く要求されるときに、その供給を収縮させるという効果をあらわしたのであった。」

（渡邊佐平『金融論』岩波書店、1957年、第8刷、176－177頁）

「外国へ流れてゆく五ポンドごとに、国内通貨から五ポンド銀行券が引上げられるのであり、かくして流通手段の分量は、まさにそれが最も多く最も緊急に必要とされる瞬間に縮小される」　（森七郎『改訂 通貨制度論』文人書房、1972年、6版、151頁）

「イングランド銀行の準備金から五ポンドの金が流出するたびに五ポンド銀行券が発行部に帰って廃棄され、準備金に五ポンド金貨が加わるたびに新たな五ポンド銀行券が流通に入るという、厳密に金属流通の法則に紙幣流通を順応させる制度が樹立されたわけである。」（玉野井昌夫「第1章 資本主義の確立と銀行制度の成立」、大島清他『金融論』東京大学出版会、1968年、8刷、61頁）

◎「銀行券量を金準備額に従わせようとした」のがピール銀行法だから、以上のような説明には何の問題もない？

⇒　現実に起きた事態は法律の規定と全く異なるものだった

図1　ピール銀行法下における金準備と銀行券流通の変動：1844.9.7～45.7.26（週次）

図２　ピール銀行法下における金準備と銀行券流通の変動：1847.2.6～47.12.25（週次）

図１・図２　出典）*First and Second Reports from the Secret Committee on Commercial Distress*, Appendix (British Parliamentary Papers, 1847-48 Vol.Ⅷ Part Ⅱ), No.5.

・「イングランド銀行の準備金から五ポンドの金が流出するたびに五ポンド銀行券が発行部に帰って廃棄される」・・・×

銀行券流通量の変動は金準備増減と全く対応していない

・図２　ピール銀行法下で発生した最初の恐慌（1847年恐慌）

銀行券は　金準備減少⇒増加、金準備増加⇒減少

◎最低限必要な基礎的事実の確認さえナシ

ピール銀行法が有する大きな意義を汲み取れない！

本日の課題＝ピール銀行法の意義を改めて確認していった過程を回顧

＋（未だ明快に展開できないが）当時は十分に意識していなかった視点を取り込んで、ピール銀行法がもつ意義の豊富化を試みる

Ⅱトゥックのピール銀行法認識

◎ピール銀行法の意義を「改めて・・・」　すでにトゥック（T. Tooke）が指摘
（＊マルクス（K. Marx）の『資本論』第3巻第5編　　銀行学派からの抜書き
　⇒　銀行学派の理論（銀行原理）が優れていると感じつつ、トゥックの論述から窺える当時の実態と我々の歴史理解とがかなり異なる点が気になって・・・）

↓

◎理論史的研究から実態そのものを解明する研究へ

・最初に行なった作業　ピール銀行法下での銀行券と金準備の変動様相の確認

トゥックは「5ポンドの金が流出するたびに5ポンド銀行券が帰ってくる」ことなど起こる筈がないと指摘

（図１　トゥックの『物価史』に付されている統計表から　⇒　イギリス議会資料　British Parliamentary Papers　収録のイングランド銀行の勘定から作成　⇒今日　　イングランド銀行文書室 所蔵資料から作成可能）

Cannon
Street
Station
4 minutes
WAIT
43

ANNO · VICTORIAE · R · VIII · RESTAVRATVM
London 2012
Inspire a generation
WELLINGTON
ERECTED
JUNE 18
1844

Waterloo 26
The Sky Difference
It's catching the Ashes on the bus.
sky

IN
WAY IN
EMERGENCY
EXIT ONLY
OUT

on behalf of H.M.Treasury since the 19th September 1949?"

Copy in CEC (Room 1/6)

File - 20.9.49

THE CHIEF CASHIER.

Revaluation of Issue Department Gold

I attach a short historical note (by Clarke).

It now remains for decision whether the gold shall be revalued at 248s/-, the new buying price from the public, or 250s/-, the new parity price: the first would have the effect of increasing the present figure of £247,833 to about £356,822; the second to about £359,700.

The authority for revaluing is Treasury Minute dated 28th February 1939 (also attached): it has been confirmed with the Treasury that a new Treasury Minute is not required.

The method of adjustment may be -

(a) a transfer of gold to the E.E.Account, leaving the value of gold in the Issue Department virtually unaltered;

(b) a transfer of cash to the E.E.Account, increasing accordingly the gold holding of the Issue Department and the Note Issue.

In 1939, when the price of gold was varying from week to week, the changes were rung on these two methods.

(Init.) H.G.A.

20th September 1949.

TOP SECRET

REVALUATION DRILL

General Comment

Thanks to Exchange Control, we should not have to act, as in 1931, under the pressure of a heavy flight of capital, involving an immediate drain of gold. Except for American accounts, no foreigner can withdraw his sterling directly, nor can U.K. residents send funds outside the sterling area. We have therefore much greater liberty of action in choosing our moment etc. On this basis, we might allow a week after the final decision before it is put into effect.

The measures we should now plan are under three heads:-

A. External Consultation, Information etc.

B. Direct financial consequences.

C. Technical precautions and adjustments.

[Points marked with an asterisk can be prepared, in skeleton form, some time in advance.]

A. External Consultation, Information etc.

Saturday.	D.-7.	Effective decision (The King to be informed)
Sunday.	D-6.	Top Secret advice to Sterling Dominions. (Query India, Pakistan and Ceylon later)
Tuesday.	D-4	Top level approach to U.S. Treasury, Burma and Canada.
Thursday.	D-2	Notification to International Monetary Fund. Consultation or Notification of Monetary Agreement countries under existing agreements.
Friday.	D-1	Inform Colonies and Currency Boards Top Secret.
Saturday.	D.Day	Action 9.0 p.m. (4.0 p.m. New York 2.0 p.m. San Francisco Check times according to season of year). Press Release Statement by I.M.F.

/Press

RATES OF DISCOUNT, EXCHANGES,

MISCELLANEOUS PRICES,

1957.		Reserve, Bank of England.	Rates of Discount. Great Britain.	France.	Germany.	The Netherlands.	India.	U.S.A. (New York)	Exchanges on London. New York. T.T. Dollars.	Montreal. T.T. Dollars.	Paris. T.T. Francs.	Amsterdam. T.T. Florins.
July	3	57.376.	5	4	4½	3¾	4	3	2.79 5/32	2.66	980¾	10.64¾
	10	39.121	5	4	4½	3¾	4	3	2.79 3/32	2.65 25/32	981½	10.64 7/16
	17	29.474	5	4	4½	4¼	4	3	2.78 23/32	2.64 11/16	980⅝	10.62⅝
	24	12.559	5	4	4½	4¼	4	3	2.78 13/32	2.64 15/32	980	10.63¼
	31	18.300	5	4	4½	4¼	4	3	2.78 15/32	2.63 3/32	980⅛	10.63⅜
August	7	22.592	5	4	4½	4¼	4	3	2.78 9/32	2.63 15/16	980⅛	10.64
	14	40.729	5	5	4½	4¼	4	3	2.78 9/32	2.63 11/16	1167 5/16	10.64
	21	20.819	5	5	4½	5	4	3	2.78 13/32	2.62 9/16	1167 5/16	10.64
	28	32.322	5	5	4½	5	4	3½	2.78 9/32	2.65	1167 5/16	10.63
September	4	38.874	5	5	4½	5	4	3½	2.78 9/32	2.64 11/16	1167 5/16	10.62
	11	19.030	5	5	4½	5	4	3½	2.78 9/32	2.66 5/8	1175	10.62
	18	26.776	5	5	4	5	4	3½	2.78 9/32	2.67	1169¾	10.60
	25	35.327	7	5	4	5	4	3½	2.78¾	2.68 5/16	1175½	10.63
October	2	31.889	7	5	4	5	4	3½	2.79 15/32	2.70¼	1177	10.62
	9	29.804	7	5	4	5	4	3½	2.80 7/32	2.71⅜	1182¾	10.62
	16	33.093	7	5	4	5	4	3½	2.80 13/32	2.70 15/32	1182⅞	10.62
	23	36.748	7	5	4	5	4	3½	2.80 3/32	2.69¾	1183	10.62
	30	35.851	7	5	4	5	4	3½	2.79 27/32	2.67 13/16	1184⅛	10.62
November	6	26.522	7	5	4	5	4	3½	2.80 3/32	2.69⅛	1177⅛	10.6
	13	19.295	7	5	4	5	4	3½	2.80 7/32	2.69 3/32	1182⅝	10.6
	20	15.753	7	5	4	5	4	3	2.80 15/32	2.69 15/32	1183¾	10.6
	27	51.329	7	5	4	5	4	3	2.80 31/32	2.71 15/32	1183⅗	10.6
December	4	18.745	7	5	4	5	4	3	2.80 19/32	2.72	1178⅛	10.6
	11	21.880	7	5	4	5	4	3	2.80 9/32	2.72 27/32	1177¼	10.6
	18	34.159	7	5	4	5	4	3	2.80 15/32	2.75 3/32	1175	10.6
	25	24.766	7	5	4	5	4	3	2.80 13/32	2.75⅝	1171¾	10.5

Knightsbridge
9
10
N9
9 Royal Albert Hall Hyde Park Corner
Step into 1000 years of history
9 Royal Albert Hall Hyde Park Corner
TRAFALGAR SQUARE
ALD 913B
BUS

◎ピール銀行法下の事態

正確に確認すれば、通貨原理が描いていたような調整過程は起こりえず、貨幣数量説も成り立たないことを実証するものだった　＝ピール銀行法の意義！

◎トゥック（銀行学派）　発券銀行には発券量を決定する力はない

「イングランド銀行は、どのような場合においても、公衆の間に既に流通している額に10万ポンドを、いやおそらく100ポンドでも、自分自身の意思によって追加することはできないだろう」。

（Tooke, T.［1844］p.60、玉野井芳郎訳、114頁）

「イングランド銀行あるいは地方銀行家が貸付を行なったり手形を割り引いたりする場合、借り手あるいは割引依頼人は、どのような形態でその額を欲しいのかを問われる。イングランド銀行の場合には、借り手は、その割引または貸付が承認されたとき、銀行券、金、帳簿信用（book credit）のいずれによって受け取るかを選択する。私は、大多数の場合、帳簿信用が選択されると思う。……貸付を受けたり手形を割り引いてもらったりした人が三つの方法のどれによって支払いを受けるのを選ぶかは、まったく、その人が抱いている目的にかかっている。したがって、次のことは明白である。すなわち、イングランド銀行は、貸付を行なったとしても、その貸し付けられた額にせよ、その内のどんな部分にせよ、それが公衆の手にある同行券流通量を増加させるということを保証できない。」

（Tooke, T.［1848］Vol.4, p.184、藤塚知義訳、第４巻、201-202頁）

・トゥック（銀行学派）　銀行券は必要に応じて流通に出ていくもの　＝金準備で統制はできない　＝貨幣量は物価や信用状態の結果　＝「貨幣量が増加すれば
物価が上昇」 はありえない

（トゥック理論のマルクスによる評価）
「ヒュームの理論、つまり重金主義に対する抽象的対立が、こうしてゆきつくところまで発展させられたあと、結局また、ステュアートのしたような貨幣の具体的把握が、トマス・トゥックによってその正しい位置に戻された。トゥックは彼の諸原理を何かある理論から導き出しているのではなくて、1793年から1856年までの商品価格の歴史の良心的な分析から導き出しているのである。……商品価格の歴史の継続的研究は、彼をして否応なく次のような点を洞察させることとなった。すなわち、この理論［リカードやオーヴァーストーンの理論を指す―引用者］が前提しているような価格と通貨の量との間の直接の連関は単なる幻影にすぎないということ、通貨の膨張と収縮とは、貴金属の価値が同じままである場合には、常に価格変動の結果であって、決して原因ではないということ、…。」（ Marx, K.［1859］S.196、武田隆夫他訳、248-249頁）

・トゥックの理論（銀行原理）は内生的貨幣供給論！

Ⅲ　銀行原理から内生的貨幣供給論へ

◎最初の単著『イングランド銀行金融政策の形成』（名古屋大学出版会、1989年）

・貨幣数量説は誤り　＝内生的貨幣供給論の立場から外生説を批判的に見てはいたが、ピール銀行法を貨幣供給の内生・外生の問題と結びつけて論じなかった

・その後いわゆるマネーサプライ論争　　⇒ピール銀行法下の実態は内生説の正しさを示している、という点を強く訴える必要

◎二つ目の単著『ポンドの苦闘』（名古屋大学出版会、2004年）

・（ピール銀行法は直接の対象ではなかったが）イギリス金融史の実態を根拠に外生的貨幣供給論批判を前面に

貨幣量は外生的に決定できるのか、それとも内生的に決まるのか

ベースマネーを操作することによりマネーサプライを管理できるのか、

それともベースマネーは市中銀行による信用供与の結果なのか

（日本銀行は2008年からマネーサプライ統計ではなくマネーストック統計を発表しているが、本日はマネーサプライと表現）

・このように問い、イギリスの実態に従う限り内生説を採るしかないと主張

⇒　多くの批判

Yuichi Kanai
金井雄一 著

The Struggle of Pound Sterling

ポンドの苦闘

金本位制とは何だったのか

金本位制神話への根底的批判

両大戦間期イギリスで，戦争，恐慌などの曲折を経て最終的に放棄された
金本位制の実態を，イングランド銀行金融政策の精査により解明，
今日のマネタリズムにも忍び込む金本位制神話を解体して金融政策の本質に迫るとともに，
戦後へと続く戦間期の資本主義史に新たな展望を拓く労作。

定価（本体 4,800円＋税）　名古屋大学出版会

◎外生説の立場からの批判　……　OK
　But『ポンドの苦闘』を高く評価する立場からの批判には・・・

「金井が議論を金準備と銀行券の関係にしぼって展開しており、信用貨幣の大宗をなし、かつ中央銀行券発行の動因ともなる預金通貨について、ほとんど言及がないことはいささか不思議である。…預金通貨を含む通貨総量が金準備とどのような関係にあったか、資料の制約はあろうが、この点の解明があれば金井の主張はより説得力を持つものとなったであろう。」（吉田暁　「書評：金井雄一著『ポンドの苦闘―金本位制とは何だったのか』」『金融経済研究』23、116頁、2006年）

◎実証が預金通貨も含めて行なわれるべきこと　　指摘される前から意識
「預金通貨統計が金準備や銀行券に比べて未整備であり、銀行券のように疑問の余地なき実証を提示することは困難なので、従来の金本位制理解をまず最も明確に確認できるところから解体したいという狙いから行なっているが、ただし預金通貨も含めるとこの主張が成立しないとしたら私見に意味はないので、預金通貨を含めても私見は無意味になるわけではないという点を示したい」と述べて、　⇒　図３

図３の出典：金準備: *The Economist*, Banking Supplement, 1922-34. 現金: Capie, F. and M. Collins［1983］, p.99. 預金: Capie, F. and A. Webber［1985］, pp.442-445.

図3　金準備と「現金＋預金」の変動：1922.1～34.12（月次）

・金準備と、銀行が保有する分を除いた現金および一般銀行の預金（≒Ｍ１）との変動

⇒ 預金通貨を含めても、金準備と銀行券に関する主張を変更しなくてよい

（ただし）

◎預金通貨については統計の不十分性とは別に問題がもう一つあり

・日本におけるベースマネーとマネーサプライの変動を示す図

図４…「量的緩和政策」期　ベースマネーとマネーサプライの対前年同月比（％）

図５…「量的・質的金融緩和政策」期　ベースマネーとマネーサプライの変動

図４・図５の出典：日銀ホームページ、時系列統計データサイト。

図4　ベースマネーとマネーサプライの変動（対前年比）：2001.1～2004.12（月次）

図5　ベースマネーとマネーサプライの変動：2011.4～2014.12（月次）

・内生説（中央銀行は自分の側から貨幣供給を増やせない）の立場からは、図4も図5も「ベースマネーを増やしてもマネーサプライは増えない」ことを示していると解釈
しかし、「日本銀行はマネーサプライが増えなくてもベースマネーを現に増やせている、だからベースマネーが受動的に決定されるとは言えない」という批判

・ベースマネーは確かに増えているが、ベースマネー増加の中身をみると（図5参照）発券高は増えず（日銀券は出ていかず）、金融機関の日銀預金（日銀当預）が膨張

日銀当預　1990年代　3兆～5兆円
2002年頃　10兆円超　2003年　20兆円台
2004年　30兆円台　2014年末　170兆円超

GDPの大きさがほとんど同じだった時代に4兆～5兆円の日銀当預で決済はOKとすると、膨大に増加した預金通貨はほとんど動いていないのでは
＝日銀はベースマネーを増やせていないのでは

・それを説得的に主張するには預金通貨の流通速度を正確に測定するしかない
　　貨幣の流通速度 「マーシャルのk」（の逆数）・・・短期的流通速度ではない

◎預金通貨の短期的流通速度の厳密な測定　　困難
・内生説と外生説の対立は結局決着をみないのではないか・・・、水かけ論？
18世紀のヒューム（D. Hume） 対 ステュアート（J. Stuart）
地金主義 対 反地金主義、　通貨学派 対 銀行学派、
小宮隆太郎　対 外山茂、　岩田規久男　対　翁邦夫　　等々

・内生説を説得的に主張する別の方法の模索
内生説 「ベースマネーを操作することによってマネーサプライを統制できる」を否定するだけでなく 「発券が行なわれ、銀行券が流通し、それが銀行に預金される」を否定
つまり 「マネーサプライが先で、ベースマネーはその結果として形成される」
＝「初めに銀行信用供与すなわち預金創出がなされ、銀行券形態が必要な場合にはそこから銀行券が引き出され、市中銀行が銀行券不足になれば中央銀行当座預金から銀行券が引き出される（すなわち発券）」
＝「まず貨幣があって、その後に信用が展開する」のではなく、「まず信用が創出されて、そこから貨幣が生まれる」という見解

◎それを外生説否定の実証作業に使う方法はありえないか？
（実は）それを模索する方向が出てきたことには、もう一つ別のことも関係
全く別の世界、すなわち経済史学というよりも歴史学と呼ぶべき世界から、
したがって内生説とは関係なしに出ていたことがこの論点に絡む

Ⅳ信用先行説と内生的貨幣供給論

◎貨幣・信用の発展に関する一般的理解　　物々交換　⇒貨幣　⇒貨幣の貸借＝信用

・But　この話には実証的根拠はあまりなし
私的所有がある程度広がれば物々交換は起こりうるとしても
〇偶発的、非日常的な交換
×社会の再生産を担う流通が全て物々交換によって遂行される社会

・「人々が物々交換の困難と不便を取り除くために貨幣を発明したという見解は、他の数多くの憶測上の歴史に加えて、ごみ箱に捨てさるべき信頼のおけない考え方に属する。・・・貨幣の起源は曖昧である。にもかかわらず、かなり確かなことは、人類史において人々は物々交換を通じて何らかの大量の交易をかつて行ってきた時期はない、ということである。交易の始まりと貨幣の起源の間には、溝が存在したにしても非常に小さいか、または恐らく全く存在しなかった。」（A. A. Young　、松尾隆『アレン・ヤングの経済思想』ミネルヴァ書房、208頁）

◎信用先行説

・たとえばメソポタミア文明　　財や地代などが銀建て価格を持っていたのに市場交換は発展せず、　銀が貨幣として流通することもなかった

（他の史実・・・省略）

「貨幣は古代共同体間の商品交換から生まれたものではなく、古代の都市国家や神殿の家産的経済における経済計算の必要から、債務を記録する抽象的な計算貨幣として生まれたと見られる。そこでは、流通鋳貨は必要とされず、数千年に亘って、コインは存在しなかった。また古代ギリシャの小アジアでB.C.7世紀に鋳造された最古の鋳貨は、傭兵への支払手段であって、国家の金属製の債務証書であった。」

（楊枝嗣朗　『歴史の中の貨幣』文眞堂、146頁）

・（意識的に振り返れば）貨幣は債務を記録するための観念的な計算貨幣（イマジナリー・マネー）として登場したという見解は、経済学史の中でも少なくはない
ケインズ（J. M. Keynes）、クナップ（G. F. Knapp）、ポランニー（K. Polany）等

・（加えて）17～18世紀に活動したアムステルダム銀行が決済機能を果たすために用いていた「バンク・マネー」は、一定重量の金属に結びつけられたものではなく、帳簿上にのみ存在する預金通貨であり、言わばイマジナリー・マネーだった。
ステュアートは、その「バンク・マネー」に着目し、それは純金ポンドや純銀ポンドより確定的な価値を持つと捉えていた
×金属貨幣が先にあり、そこから預金通貨が形成される
〇預金通貨（観念的な計算貨幣）の方が本源的、金属鋳貨はそれに従って流通

・信用関係が形成され、貨幣はそこから生まれる　＝（仮称）「信用先行説」
　信用先行説　考古学や古代史における貨幣の話……
　　↓
　内生説とは信用先行説ではないのか。 信用先行説とは内生説ではないのか。
貨幣生成史と発達した資本主義の下での信用システムの議論が交錯

・考古学、古代史などの実証研究には外生説批判という問題意識はなかっただろうが…信用先行説は外生説を否定するための実証に生かせるのではないか
（預金通貨の流通速度が必要になるものとは異なる方法が可能にならないか？）

◎歴史＝論理か、歴史≠論理か

・楊枝　信用先行説に早くから着目しただけでなく、信用先行説と内生的貨幣供給論とが通底するものであることにも早くから注目

（ただし、そこに一つの問題が…）

・歴史＝論理の立場　　歴史的な生成順序が信用→貨幣なら貨幣信用理論もそのように構成されるべき

歴史≠論理の立場　　発達した資本主義経済において商品・貨幣・信用がどのよ
うに編成されているのかという問題と、それらが歴史的にはどのような順序で生成してきたのかは、ひとまず別問題

楊枝　（必ずしも歴史＝論理と明言せず　But）従来の貨幣信用論を厳しく批判
貨幣論再構成の必要を主張　　⇒　内生的貨幣供給論に立つ論者にも浸透せず

・（私自身は　一応）　歴史≠論理の立場

信用先行という史実が仮に普遍的なものであったとしても、そこから直ちに資本主義経済に関する理論体系の根本的再構成を訴える必要はナシ

信用先行説、そして信用先行説と内生的貨幣供給論とが通底することを外生説の歴史的実証的否定に生かす方向を模索するのみ

◎以上を外生説の実証的否定に生かす方向の模索
（本日のテーマに即した形で言い直せば）＝内生的貨幣供給論と信用先行説とは
金融史研究におけるピール銀行法の意義をどのように豊富化するか

（本日は以下を指摘するのみ）
①図1・図2は、内生的貨幣供給論と信用先行説を踏まえてみるならば
金準備による銀行券統制などできないことを示していただけでなく、
銀行券が流通へ出ていくこと即ち発券の前提には信用供与があることを示していた
②パニックの際に大蔵省書簡が出されてイングランド銀行が信用供与を拡大
しうると分かったら直ちに銀行券が還流してくるという事態は、
信用供与さえ行なわれるなら銀行券は不要であることを示していただけでなく、
信用供与と発券とはどちらが先かも示していた

＊「我々は銀行券が欲しいのではなくて信用（confidence）を与えて欲しいのだ。・・・もし我々が銀行券を入手できると考えているならば、我々はもはや銀行券を欲しないだろう」（『イングランド銀行金融政策の形成』、91頁）
1847年恐慌後の議会において紹介された実業家たちのこの言葉を、手形が割り引かれて預金通貨が得られるなら銀行券を引き出す必要はないのだということを示すために引用したが、内生的貨幣供給論と信用先行説を踏まえてみるならば、それは信用供与と発券とはどちらが先かも示していたことが浮き彫りに！

・「問題だったのは、・・・銀行融資（banking accommodation）の額であって流通にある銀行券の額ではない」（同上書、91頁）というトゥックの言葉も、内生的貨幣供給論と信用先行説を踏まえてみるならば、単に「信用供与があれば銀行券は不要になる」というだけでなく、信用が先であったことに気づかせてくれる

以上のように、（その一端のみだが）内生的貨幣供給論と信用先行説は金融史研究おけるピール銀行法の意義を豊富にしてくれる

Ⅴ　むすびにかえて

◎三つ目の単著『ポンドの譲位』（名古屋大学出版会、2014年）……理論的問題を前面に出さず
But、外生説の歴史的実証的否定という課題を改めて痛感
ピール銀行法下の現実によって否定された筈の外生説　　死滅せず

衰退史観を書き換える

ポンドはなす術もなく凋落したのか。
ユーロダラーの発展と国際金融市場シティの隆盛も視野に、戦後ポンドの役割を再評価、
福祉国家化による国内均衡優先へと舵をきったイギリスの政策転換をも捉えて、
基軸通貨交代の知られざる意義を描きだす。

定価（本体5,500円＋税） 名古屋大学出版会

Through subway for ticket office and platform 1 for
Underground to City
Kew Gardens
Kew

The
National
Archives

DEFOE AVENUE

The National Archives

The National Archives
Restaurant and
Coffee Bar
Open to the Public
Monday - Closed
Tuesday - 08.30 - 18.30
Wednesday - 08.30 - 16.45
Thursday - 08.30 - 18.30
Friday - 08.30 - 16.45
Saturday - 08.30 - 16.00
Cycle sheds

The National Archives

33G
7747536
T 318/410
Return by (18/10/2012)
7843624 (Dr Yuichi Kanai)
Closure status: Open
S 06/09/2012 16:28:

2F(BP) 1/45/03 G

CONFIDENTIAL

THE EURO-DOLLAR MARKET

INTRODUCTION

This paper describes the working of the Euro-dollar market. It is largely factual, although the latter part of the paper draws attention to some of the market's disadvantages and dangers. It does not contain conclusions or policy recommendations but the short final section of the paper touches on possible future developments.

The paper is in 6 parts. Sections 1-3 deal with the operation of the market and the factors affecting it: what it is, who uses it and why it is located outside the United States (Section 1); how it operates and how far it creates credit (Section 2); and how it is affected by the US payments deficit and US monetary policy (Section 3). The effects of the market on monetary conditions in the United States and elsewhere are described in Section 4, the stability of the market in Section 5 and the outlook in Section 6.

Tables, charts, a summary of the main national regulations affecting the market and a bibliography are included in an appendix.

R F HASELDEN
T J BURR

F(BP) Division
21 May 1971

T 354/19

GOLD AND DOLLAR RESERVES

155

U.S. $ millions

	GOLD	U.S. DOLLARS	CANADIAN DOLLARS	TOTAL GOLD AND DOLLARS
June 1956	2,080	261	43	2,385
July 1956	2,021	342	42	2,405
August 1956	2,029	199	48	2,276
September 1956	2,042	257	29	2,328
October 1956	2,045	170	29	2,244
November 1956	1,835	100	30	1,965
December 1956	1,773	351	9	2,133
January 1957	1,875	198	11	2,084
February 1957	1,872	260	15	2,147
March 1957	1,881	318	11	2,209
April 1957	1,893	395	32	2,320
May 1957	1,909	413	23	2,345
June 1957	1,901	469	12	2,381
July 1957	1,888	466	12	2,367
August 1957	1,795	329	18	2,142
September 1957	1,648	192	10	1,850
October 1957	1,539	543	11	2,093
November 1957	1,567	605	14	2,185
December 1957	1,555	698	20	2,273
January 1958	1,590	793	21	2,404
February 1958	1,810	715	14	2,539
March 1958	2,154	605	12	2,770
April 1958	2,504	400	9	2,914

Yes: purchases of gold from the US. for $.

Fire
assembly
point

THE RAILWAY

Way out
KEW GARDENS
RUN THE
TREE
ATHLON

2
← Way out
3
1
MORRISONS

ピール銀行法下の現実によって否定された筈の
外生説　死滅せず

内生的貨幣供給論と信用先行説、そしてその両者が
通底することを踏まえつつ、
ピール銀行法が金融史研究にとって有する意義を
最大限に膨らませ、
その先に、物価-正貨流出入機構、地金主義、通貨
原理、マネタリズム等の　貨幣数量説的、外生説的
諸見解の歴史実証的否定を模索していきたい

御清聴ありがとうございました。

＜資料＞

Bank of England Archive所蔵資料

The National Archives所蔵資料

British Parliamentary Papers

Hansard's Parliamentary Debates

The Economist, Banking Supplement.

＜文献＞

Capie, F. and M. Collins［1983］*The Inter-War British Economy: A Statistical Abstract*, Manchester.

Capie, F. and A. Webber［1985］*A Monetary History of the United Kingdom 1870-1982*, Vol.1, London.

Marx, K.［1859］*Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Berlin（武田隆夫他訳『経済学批判』岩波書店、1956年）.

Marx, K.［1894］hrsg. v. F. Engels, Das Kapital, Bd.3, Hamburg（長谷部文雄訳『資本論（七）』角川書店、1962年）.

Tooke, T.［1844］*An Inquiry into the Currency Principle*, 2nd ed., London（玉野井芳郎訳『通貨原理の研究』日本評論社、1947年）.

Tooke, T.［1838～1848］*A History of Prices, Vol.1-4*, London（藤塚知義訳『物価史』第1－4巻、東洋経済新報社、1978-81年）.

Tooke, T. and W. Newmarch［1857］*A History of Prices, Vol.5-6*, London.

板倉譲治［1995］『私の金融論』慶應通信。
岩田規久男［1992］「日銀理論を放棄せよ」『週間東洋経済』9月12日号。
宇野隆夫［1998］「原始・古代の流通」、田中琢／金関恕編『都市と工業と流通（古代史の論点３）』小学館。
翁邦雄［1992］「日銀理論は間違っていない」『週間東洋経済』10月10日号。
――［1993］『金融政策―中央銀行の視点と選択』東洋経済新報社。
奥山忠信［2009］「ジェームズ・ステュアートの貨幣数量説批判」『埼玉学園大学紀要（経営学部篇）』第9号。
金井雄一［1982］「1844年銀行法の理論的・歴史的意義」『土地制度史学』96。
―― ［1989］『イングランド銀行金融政策の形成』名古屋大学出版会。
―― ［2004］『ポンドの苦闘』名古屋大学出版会。
―― ［2005］「金本位制はどのように機能していたのか―両大戦間期イギリスの実態から」『信用理論研究』23。
―― ［2014］『ポンドの譲位』名古屋大学出版会。
黒田明伸［2003］『貨幣システムの世界史』岩波書店。
小宮隆太郎［1976］「昭和四十八、九年インフレーションの原因」『経済学論集』42－1。
杉沢一美［2005］「書評：金井雄一『ポンドの苦闘―金本位制とは何だったのか』」『経済学史研究』47-1。
外山茂［1980］『金融問題21の誤解』東洋経済新報社。
西川元彦［1984］『中央銀行―セントラル・バンキングの歴史と理論』東洋経済新報社。
橋本理博［2014］「アムステルダム銀行の決済システム―― 17・18世紀における「バンク・マネー」の意義 ――」（名古屋大学大学院経済学研究科提出：博士論文）
H. J. ベッカー著、鈴木佳秀訳［1989］『古代オリエントの法と社会：旧約聖書とハンムラビ法典』ヨルダン社。
松尾隆［2012］『アレン・ヤングの経済思想』ミネルヴァ書房。
楊枝嗣朗［2004］『近代初期イギリス金融革命』ミネルヴァ書房。
―― ［2007］「現代貨幣論と国際通貨――木下悦二氏の国際通貨論の衝撃とその後」『佐賀大学経済論集』40－2。
―― ［2011］「文献紹介 J. S. ロジャーズ『イギリスにおける商事法の発展 ― 手形が紙幣となるまで ― 』」『佐賀大学経済論集』44－3。
―― ［2012］『歴史の中の貨幣』文眞堂。
横山昭雄［1977］『現代の金融構造』日本経済新聞社。
吉田暁［2002］『決済システムと銀行・中央銀行』日本経済評論社。
――［2006］「書評：金井雄一著『ポンドの苦闘―金本位制とは何だったのか』」『金融経済研究』23。